

<報告討論概要>

立命館創始 140 年・学園創立 110 周年記念 国際シンポジウム

「グローバル危機後の新たな東アジア構築」 報告討論概要と成果

報告討論ではまず、松野 周治・国際地域研究所所長（当時）からシンポジウムの主旨が説明された。そこでは、当シンポジウムは立命館学園創立 110 周年を記念して開催されているものであるが、2008 年に世界を襲った金融危機とその克服の在り方について、20 世紀初め以降の世界史並びに、東アジアの現状を踏まえて検討したい、との考えが述べられた。

ついで、劉 江永・清華大学国際問題研究所教授の「現実を踏まえ、共同体を目指す一東アジア共同体への道」と題する報告が行われた。当報告では、一方では ASEAN + 3 が FTA（自由貿易協定）の核となっているばかりか、ARF が安全保障面でも大きな役割を果たしているが、他方では、それを超えるアジア太平洋全域の動きもあるため、ASEAN + 3 を東アジアコア・コミュニティ（East Asia Core Community）として構築していく展望が示された。

それに対して、益田 実・立命館大学国際関係学部教授は「ヨーロッパ統合の歴史過程と東アジア：過去 110 年の経験は何を物語るか？」と題した報告を行った。それによれば、ヨーロッパはアジアと比べてもはるかに領土の変動も大きく、民族居住地域の複雑で、いったんは国民国家の形成に向けてその整理が試みられたが、結局達成できず、そのことから統合に向かった。しかし、アジアの場合国境はより自然で安定的であって、そのような必要性が乏しく、統合といっても極めて漸進的なものとならざるを得ないとされた。

Hyung-Kook KIM・韓国・淑明女子大学社会科学部長の“The North Korean Power Succession and International Politics in Northeast Asia”と題された報告では、1994 年の金日成から金正日への権力継承と現在為されようとしている金正日から金正恩への権力継承の比較検討が行われ、権力継承に失敗したり、場合によって韓国によって併合される可能性すらあり、十分な対処が必要であるとの主張が行われた。

沈 銘輝・中国社会科学院アジア太平洋研究所副研究員の“Towards a Region-wide FTA in East Asia—A Chinese perspective”と題された報告では、東アジアの FTA の必要性を認めつつ、そこに存在する問題点をも指摘し、現実的対処を主張するものであった。すなわち、東アジアの域内貿易比率の上昇がしばしば主張されるが、そこにはダブルカウント（とくに香港などの中継貿易によるダブルカウント）があり過大評価はすべきではない。また、2 国間の FTA が錯綜することで、バグワッティなどの言う「ヌードル・ボウル現象」も発生する。したがって、多国間 FTA が追求されていくべきだが、政治問題その他もあり、一挙的には進まず、したがって、成果にしたがってステップ・バイ・ステップで進めるしかない、との主張である。

中野 佳裕・立命館大学客員研究員の「アジアの市民社会から見たグローバル経済危機：デモクラシー、エコロジー、ポスト開発」と題された報告では、アジアの開発裏で進行する社会的諸問題が指摘され、アジアの開発は単純な経済開発から社会開発を含んだものへと発展すべきであることが主張された。

パネルディスカッションは以下の 4 点を中心に行われた。

経済問題に関して、現在、ASEAN + 3（日中韓）の枠組みで FTA が進められているが、+ 3 の日中韓の直接的な FTA 交渉は遅々として進んでいない。経済規模から言ってもはるかに大きい + 3 の側が ASEAN の枠組みにぶら下がる形になぜなってしまうのか。この構造は今後どうすればよいのか。

政治問題に関して、北朝鮮の問題は一国だけの問題ではなく、周辺各国に多大な影響を与える問題でもある。アジアの周辺諸国は北朝鮮問題に対してどのような対応をすべきなのか。

市民社会問題に関して、アジアにおいては経済開発が進む一方で市民社会の形成が遅れている。それはなぜか。また、どのようにすべきか。

東アジア共同体に関して、「東アジア共同体」は必要なのか、必要でないのか。あるいは、別の形の統合形態がありうるのか。

シンポの成果

シンポは東アジアの統合について、ASEAN + 3 の位置と役割、ヨーロッパの歴史との比較、北朝鮮問題を中心とする安全保障問題の取り扱い、FTA の形態、市民社会形成との関わり、と同じ問題をさまざまな角度から論じたもので極めて立体的な議論ができたと思われる。また、

ゲストでお呼びした劉江永氏は現在、日中両国政府の協力で設立されている日中友好 21 世紀委員会の委員で、日中関係にも強い影響力を持つ人物であり、従来、清華大学国際問題研究所との協力関係もあまり強くなかったことから、協力関係の開拓も大きな成果であった。Hyung-Kook KIM 氏はアメリカン大学在職時および淑明女子大在職時の両方において立命館大学と緊密な協力関係を築き上げた立役者の一人であり、また、沈銘輝氏は所長で中国における東アジア共同体構想の代表的論者である張蘊嶺氏の推薦に基づき、お招きしたもので、中国社会科学院アジア太平洋研究所との協力関係の強化にもつながった。

(文責：立命館大学国際関係学部教授 中川涼司)

